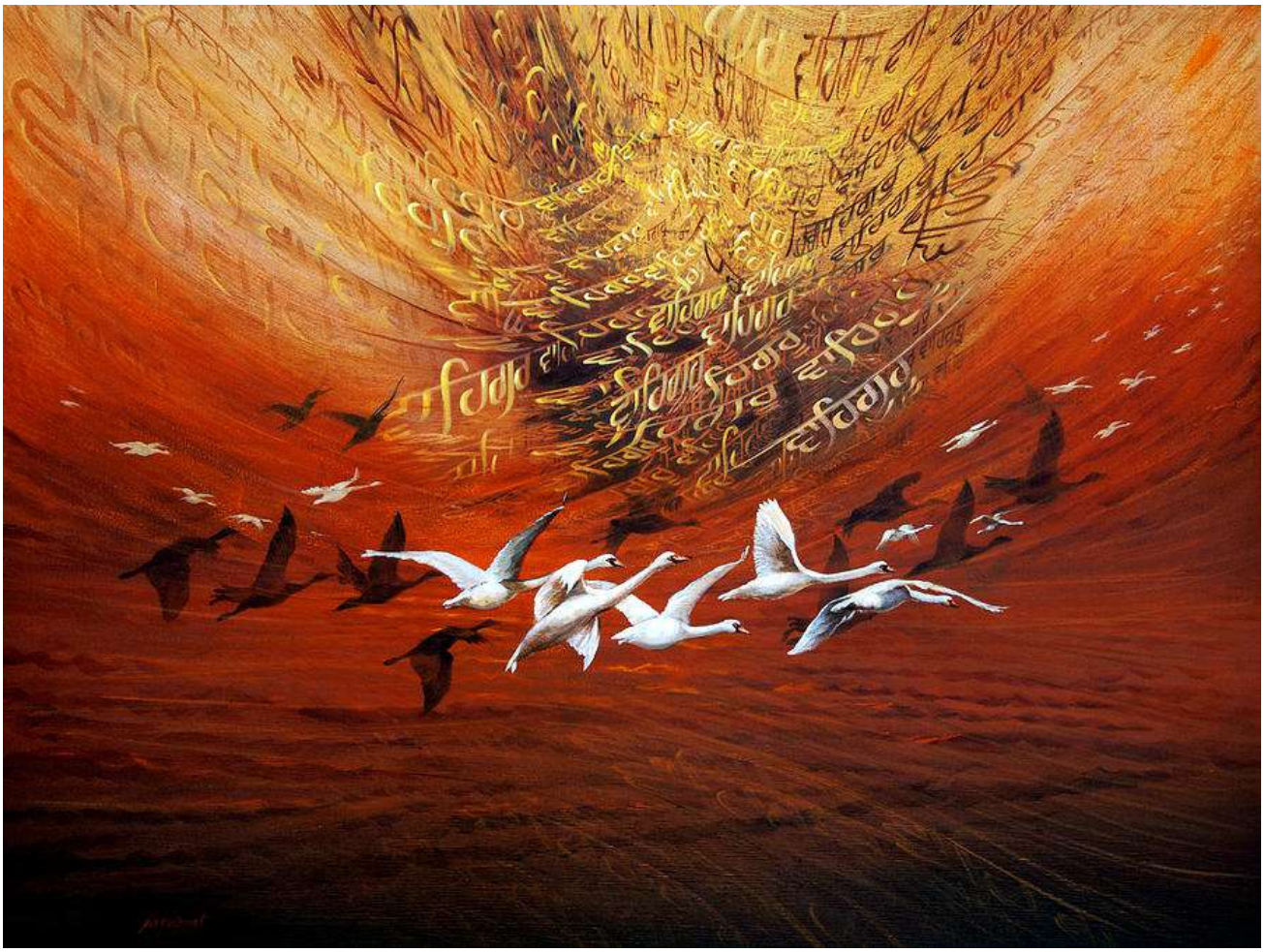
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 27

Website:「発達理論の学び舎」



© YOHEI KATO 2018

目次

521. 夢のシンボルについて

522. 内面と仕事の自己展開

523. 想いの地、デン・ハーグへ

524. デン・ハーグへ向かう列車より

525. デン・ハーグ訪問記:「マウリッツハイス美術館」より

526. 視覚の魔術師マウリッツ・エッシャーとの邂逅:エッシャー美術館にて

527. 20年の歳月を経て:国際司法裁判所との再会

528. 国際司法裁判所からの出発

529. 内側の灯火と超常現象

530. 燃焼過程を通じた成熟

531. 変化の粒子

532. キーガンとウィルバーからの脱却と回帰

533. エッシャーの『発展』という作品より

534. ミクロ・メソ・マクロな発達

535. 内なるダイモーンと絶えない灯火

536. 真冬のほふく前進

537. 「複雑性と人間発達」コースの開始冬の中の灯火

538. 内面世界の共有

539. ダイナミックシステムアプローチを活用した研究の特徴

540. 内面世界の景観を開くもの

521. 夢のシンボルについて

冬に突入して以降、毎日の睡眠時間が幾分長くなっていることに気づいた。就寝する時間は、以前と変わらず夜の十時なのだが、起床する時間が遅くなっている。ちょうど日が昇るか昇らないかの時間に目覚めるようになっているのだ。これはもしかすると、自分の中で、バイオリズムを整えるようなことが自発的に起こっているからなのかもしれない。いずれにせよ、睡眠時間を十分に確保することは、適切な食事を摂取するのと同じぐらい重要である。

十分な睡眠と適切な食事がなければ、おそらく今と同じような質と量の仕事を長きにわたって継続していくことは不可能だと思う。今日は九時間以上の睡眠を取っていたように思う。睡眠時間を十分に確保することだけではなく、睡眠の質を高める工夫も大切になるだろう。

私は就寝前に、簡単に身体をほぐし、その後、ベッドの上でヨガのシャバーサナをしながら入眠へ向かうことがここ何年かの日課になっている。また、今のようにとても寒い季節には、湯たんぽを使って腸を温めながら寝るようにしている。昨日から最低気温がマイナスに入りだしたので、ちょうど昨日から湯たんぽを使うようになった。このように、十分な量と質の睡眠を確保すると、翌朝には、自分の活動エネルギーが完全に充電されているのを感じる。

毎朝、このような感覚を得ることができなければ、それはおそらく、自分の目には見えないところで疲労が蓄積され、活動エネルギーがどんどん減退していることの表れだろう。今朝の起床後、今日の仕事を進めるためのエネルギーが十分に充電されているのを確認すると、昨夜の夢について回想していた。

昨夜の夢のシンボルは、自分にとって大変馴染みのあるものであった。それは、「空を飛ぶ」というシンボルである。自分が空を飛んでいるシンボルは、ここ数年間の夢の中で頻繁に見かけていたものなのだが、昨夜の夢は、飛んでいる際の高度が全く別次元であった。これまでの夢では、せいぜい自分が電信柱の上あたりを飛行していたり、ビルの上を飛行している程度に過ぎなかった。しかし、昨夜の夢の中では、世界最高峰の山であるエベレストの上を飛行していたのである。

9000m近い高度を飛んでいたため、手足が凍えるような感覚があったのも興味深い。地上界でこのような高度を飛んでいるのは初めてであったため、最初は当惑する自分がいたが、エベレストを無

事に通過した後は、モンブランやキリマンジャロなどの他の大陸で最も高い山々の上を通過することにした。この夢の帰結がどのようなものであったかは覚えていない。ただし、この夢が自分にとって大きなことを暗示していることは、確かだと思うのだ。それは、ここ最近感じていた、「一線を越えた感覚」と関係しているのかもしれない。

特に、仕事に対して付与していたこれまでの意味を超越する形で、日々の仕事に取り組むことができていることと何か関係がありそうだ。仕事は仕事なのだが、仕事を越えたところから仕事と向き合うというのは、自分の中では大きく意味が異なるのである。ようやく、自己の存在と仕事が合致してきたという感覚を掴んでいる。自己を深めるために仕事があり、仕事を深めるために自己が存在しており、両者は足並みを揃えて成熟の方向へ向かっているのを感じる。

昨夜の夢が暗示している意味を紐解いてみると、それは自分を大いに励ますものであり、ここからようやく自分の仕事が始まるのだという新鮮な気持ちで満たされている。2016/11/9

【追記】

この日記が執筆された頃は、ちょうどサマータイムが終わり、季節が冬に向かっていく時期であったと思う。二年前の秋において、11月から湯たんぽを使い始めたことがわかる。そこからどこまで湯たんぽを使い続けていたのかは定かではないが、おそらく四月末まで使っていたように記憶している。実際に、三月末を迎えた今においてもまだ湯たんぽを使って就寝している。ここ数日間睡眠時間が長かったことも、二年前のこの日記で書かれていたことと似ている。自分の心身が調整され、内側の活動エネルギーが再び充電されたかのようである。

また、この日記で書かれていた夢のシンボルも大変興味深い。この日記で書き留めていたように、この頃を境目として本当に自分の仕事がようやく始まったのだと思う。何らかの飛翔を経験したためか、ここ最近は空を飛ぶ夢はほとんど見ない。この数ヶ月そうした夢は見ていないのではないかと思う。空を飛ぶ夢が再び現れ始めたら、それはおそらく新たな飛翔の到来を暗示しているのかもしれない。改めて過去の日記を読み返してみると、現在につながることや新たな発見があり、随分と意義深いものだと思った。フローニンゲン：2018/3/23（金）09:45

© YOHEI KATO 2018

522. 内面と仕事の自己展開

今日の仕事を全て終え、一日を振り返ってみると、本日も非常に充実した日であったことがわかる。仕事の成果が目に見える形で現れているわけでは決してないのだが、仕事が確実に前に進んでいる、という推進力のようなものを感じている。こうした手応えを持ちながら、日々の仕事に取り組めているのはとても有り難い。そのような推進力の波に気づき、その波に巧く乗ることができていれば、仕事が自己展開をするかのように進展していく。

今の私は、こうした波の存在に気づき、それに巧く乗る方法のみならず、波そのものを生み出す方法を、自分なりになんとなく掴めてきている。こうした感覚を掴めるようになってきたのは、オランダで生活を始めたことと強く結びついているように思う。

ここ最近、日々の日課の中に、研究データを眺めるということが加わりつつある。これは意識的に導入したものではないのだが、現在の研究で用いている定性・定量データを眺め、あれこれ思考を巡らせることの中に、純粋な喜びをどうやら私は見出しているようなのだ。これまでは、自分の主たる研究と向き合う日というのは、毎日ではなく、数日間隔であった。その間に行っていたことは、大抵、主たる研究とは直接関係のない専門書や論文を読む、ということであった。

だが、現在は、毎日自分の主たる研究と向き合うようになっている。不思議なもので、毎日研究データを眺めるようになってから、少しずつではあるが、確実な進展が見えるようになったのである。毎日自己を観察し、自己を記述することによって、自己が自発的な展開を始めるように、日々研究データを眺めることによって、研究が自発的な展開を始めるようになっているのだ。毎日の新たな進歩を実感する時、やはり研究というのは、彫刻を掘る作業に似ていると思う。

彫刻を少しずつ掘っていくことによって、形が現れてくるのと同様に、研究と毎日少しずつでも向き合っていくことによって、形が現れてくるのだ。昨日から今日にかけての進展は、教師・学習者間の行動マトリクスが完成したことである。これは、教師のどのような働きかけが、学習者のどのような行動に結び付いているのかを示すマトリクスである。漏れることなく重なることのないマトリクスを作ることに苦戦していたのであるが、今朝研究データを眺めてみると、突然新たな概念カテゴリーを閃き、それを用いることによって、一応のマトリクスが完成したのである。ただし、もう少し洗練させておきた

い箇所があるのも事実であるため、引き続き研究データを眺めながら、あれこれと思考を巡らせたいと思う。

自己展開をする人間が営む活動だからなのかもしれないが、研究という営みが持つ自己展開力には不思議なものを感じる。これは研究に限らず、どのような仕事にも当てはまることなのだろう。私たちの内面が、自己展開をしながら成熟の方向へ向かっていくのと同様に、私たちが行う具体的な仕事も、自己展開をしながら成熟の方向へ向かっていくことは、何か重要な真理がそこに隠されていると思うのだ。この真理を見逃す時、私たちの内面も仕事も、果実を実らすことができなくなってしまうだろう。日々の研究が私の目の前に提示してくれる自己展開から、そのようなことを学ばせてもらった気がしている。

523. 想いの地、デン・ハーグへ

今からおよそ三ヶ月前の欧州小旅行と似たような気持ちが湧き上がる朝であった。今日は、早朝の六時過ぎに自宅を出発し、デン・ハーグへ観光に出かけた。自宅のドアを開けると、そこは完全に冬の朝であった。身体の芯に届くかのような寒さがそこに広がっており、糸を張りつめたような静けが辺り一面を包んでいた。こうした寒さと静けさは、逆にとても心地の良いものであった。それはおそらく、待ちに待ったデン・ハーグという街にこれから訪れることを期待する気持ちがあったおかげであろう。

静寂さの中で、心の躍動感を確かに実感していた朝というのは、八月中旬に欧州小旅行を開始したあの朝と同じである。フローニンゲンの駅に到着すると、冷えた体を温めてくれるコーヒーを購入し、デン・ハーグ行きの電車に乗車した。フローニンゲンからデン・ハーグまでは、電車で三時間弱の時間がかかる。電車に乗り込んだ時には、まだ辺りは暗く、景色を楽しむことはできなかった。そのため、持参した専門書を読みながら、しばしの時間を過ごすことにした。

実際には、専門書に目を通す前に、自分のノートを開き、昨日考えていた研究プロジェクトのある項目について、再び考えることをまず行っていた。すると幸運にも、昨日考えが滞っていた箇所に関して、様々なアイデアが湧き上がってきたのである。列車の二階席に座りながら、景色を眺めることもなく、しばらくの間、ひたすらに自分のノートにアイデアを書きつけるということを行っていた。一つのアイデアが呼び水となり、新たなアイデアが立ち上がっていく。

そして、その新しいアイデアが呼び水となり、再び新たなアイデアが芽生える、というアイデアの循環過程の中に私はいた。窓からの景色や周りの状況について、全く視野に入っていなかったことを考えると、私はノートに釘付けになっていたと言えるだろうし、アイデアの循環過程そのものが私であったとも言えるかもしれない。

昨日までの私は、今回の研究で明らかにしたい箇所に対して、どこか漠然とした違和感を抱えていた。端的に述べると、「果たして自分は本当に、この問いを明らかにしたいと思って研究に取り組んでいるのだろうか」という、研究提案書の中で提示している問いが持つ力強さのなさに疑問を感じていたのである。

しかしながら、列車の中で体験した湧き上がるアイデアのおかげで、自分が真に明らかにしたいと思う問いが明瞭になってきたのである。研究を行う当事者である本人が、その研究に意義を見出していなければ、いったい誰がその研究に意義を見出すのだろうか？という問題意識を抱えていたため、自分の中で探究に価する問いが明確になったことは極めて大きかった。ノートに文字を書く手を少し止め、こうした現象を生起させてくれた要因について、しばらく考えてみようと思った。列車の二階席の窓から景色を眺めると、ようやく朝日が昇っていた。事前に天気予報で確認していた通り、今日はフローニンゲンとデン・ハーグともに快晴である。

朝日に照らされた田園風景を眺めながら、以前言及したように、やはり場所固有の精神エネルギーというものが、私たちには備わっているのではないか、と思った。要するに、私たちはある特定の場所にいるとき、特定の精神エネルギーを帯び、その場所にふさわしいような思考を展開する、ということである。私たちの多くは、普段自分が身を置いている環境を変えることによって──自然の中へ行くことやカフェに行くことなども含まれるだろう──、これまでにはなかったようなアイデアが閃くことを体験したことがあるのではないだろうか。

こうした体験は何やら、その場に固有の力が存在しており、それが私たちの精神に影響を与えることを示唆しているように思う。実際に、私はフローニンゲンという磁場から少し離れる、という試みをしてみたために、先ほどのようなアイデアの噴出が起こったように思うのだ。当然ながら、それまでに私なりにあれこれと研究に対して考えを巡らせていたのは事実である。フローニンゲンの自宅の中であれこれと思考を重ねた後に、自宅と街そのものから離れることによって、これまで積み重ねてい

たアイデアが新たな形に変容したかのようであった。私たちが住む土地にはどこか、「精神変容作用」のようなものが間違いなくあるのではないか、と思わされる体験であった。2016/11/12

524. デン・ハーグへ向かう列車より

フローニンゲンからデン・ハーグ行きの列車に乗り、しばらくの時間が経過した。オランダの国内地図をまだ正確に把握していないため、主要都市の地理的関係が少し曖昧である。そのため、デン・ハーグに行く最中に、かなり多くの地名を頭に入れることができ、それらの位置関係を掴むことができるようになった。正直なところ、アムステルダムを通過し、スキポール国際空港を通過したその後にライデンという街が待っており、最後にデン・ハーグに着くことになるとは想定してなかった。

それくらいデン・ハーグまでの距離が遠かったのだ。列車に乗っている最中、私は自分のノートにアイデアを書きつけるか、あるいは、持参したクネン先生の主著に目を通していた。クネン先生が編集に携わった “A dynamic systems approach to adolescent development (2012)”は、読めば読むほど、新たな発見を生み出してくれる、自分にとっての良書だと再確認した。

デン・ハーグに到着するまでの間、自分のノートとその書籍を行ったり来たりする形で、自分の思考が躍動しているのを感じていた。そうした躍動感のおかげで、今回の私の研究で着目をしていた、教師・学習者間のやり取りの中で見られる思考の複雑性の挙動を、やり取りの推移を考慮しながら、二平面の「状態空間（state space）」の中で表現できる、というアイデアが生まれ、それを研究の中に盛り込んでみたいと思った。

人間の思考やアイデアの動きというのは、つくづく興味深いものである。デン・ハーグに到着するまでの三時間弱の間において、常に上記のような状態にあったわけではなく、しばらくの没入時間が経過した後は、我に返ったかのように、思考世界から再び現実世界に戻ってきた。そして、現実世界に戻ると、再び思考世界に没入したいと思っても、なかなかうまくいかないものである、ということに改めて気づいた。没入から覚め、我に返って、窓腰のテーブルに置いていたコーヒーを二口ほどすすると、四人掛けの席の目の前にいる男性の存在に気づいた。

最初その男性は、通りを挟んで横にいるオランダ人の男性たちと英語で会話をしていたため、オランダ人ではなく、英国訛りのなさからもアメリカ人のように思えた。会話の話題は、米国の大統領選

挙から始まり、米国の政党政治とオランダの政治に関する比較の話であったため、目の前の男性はアメリカ人であると思っていた。それらの話題に私も関心があったので、話に入ろうかと思ったが、結局、イヤホンを外すことなく、再び読書に向かった。結局、一度気になりだしたことから逃れることはできず、読書にも身が入らなかったため、イヤホン越しに彼らの話を聞いていた。

しばらく話を聞いて気づいたのは、目の前の男性がノルウェー人である、ということであった。熱心に米国の政党政治について話すものだから、てっきりアメリカ人かと最初は思っていたが、米国人固有の英語の話し方でもないことに途中で気づき、その後、彼自身がノルウェーから来たと述べていたので、非常にすっきりした。

列車の車内で政治談議を聞いていると、オランダ国内政治の中心地であるデン・ハーグに自分はこれから降り立つのだ、という気持ちが強化されたのは面白い。三時間弱の列車の旅を一切退屈することなく、気づけばあっという間にデン・ハーグに到着した。デン・ハーグ中央駅に降り立った瞬間、三ヶ月前にドイツのライプチヒ中央駅に降り立ったのと同じような気持ちに包まれた。これからデン・ハーグとの出会いが始まる。そのような気持ちであった。

525. デン・ハーグ訪問記:「マウリッツハイス美術館」より

デン・ハーグ中央駅から、まずはデン・ハーグにある最も有名な美術館と呼んでも過言ではないであろう「マウリッツハイス美術館」に向かって歩き出した。デン・ハーグの街を歩いてみてすぐに気づいたのは、フローニンゲンの街とはこれまた一風変わったものが息吹いている、ということであった。デン・ハーグという街は、フローニンゲンの街とは違う美しさを身にまとっていることがわかったのである。私は都市開発に関する知見をほとんど持っていないため、デン・ハーグのように、政治的な機能のみならず、経済的な機能を持ちながらも、経済原理に埋没することなく、どうやって街の美しさをこれほどまでに保っていられるのか非常に不思議であった。

時間の都合上、デン・ハーグの街を隅から隅まで見て回ったわけではないため、おそらく、現代社会の経済原理に汚染された箇所もこの街にはあると思う。だが、この街に流れる時間の感覚質は、現代社会の経済原理にまだ汚染されておらず、それは街の景観美に不可欠な目には見えない要素として確かに存在していたのである。

そのようなことを思いながら、帰りの列車の時間までに残された時間は八時間弱と限られたものであったため、デン・ハーグの街並みを堪能しながらも、少し足早にマウリッツハイス美術館へと向かった。デン・ハーグの中心に位置するこの美術館の正面玄関が見えた時、その脇には、この美術館が特に大切に所蔵している、フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」という作品が掲載された看板が見えた。

その看板を見た瞬間、昨年、実家に帰省していた時に聞いた母の話をふと思い出した。なにやら、日本でフェルメールが世に広く知られるようになる随分と前に、母はフェルメールの作品に惹かれるものがあったらしく、当時の自宅にこの作品のポスターを飾っていたそうである。その絵に関する記憶は私の中にはないのだが、もしかしたら、三十年近くも前に自分が見ていたであろう作品を、実物で見る日が来るとは思ってもみなかった。三十年という長い月日を経ての邂逅に期待をしつつ、美術館に足を踏み入れた。

受付でチケットを購入する際に、館内の巡り方に関して、受付の方に助言を求めた。その助言通りに、まずは企画展をじっくり見て回り、その後、この美術館が誇る常設展に足を運んだ。とても落ち着いた雰囲気の中、フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」や「デルフトの眺望」、そしてレンブラントの数々の作品を見て回ったことが、鮮明に記憶に残っている。

「デルフトの眺望」の実物を見て初めて気づいたのだが、この作品の中で表現されている光の当て方は実に巧みであり、光が当てられている箇所とそうではない箇所に気づいた瞬間に、そこにデルフトの街が持つ固有の時間質が体現されているように思えた。つまり、フェルメールが描いたのは、デルフトの街の物理的な眺めだけではなく、その街が固有に持つ時間の流れすらも表現していることに気づかされたのだ。「デルフトの眺望」という作品は、同じ部屋に飾られていた「真珠の耳飾りの少女」よりも、不思議な力を放っていた。

絵画作品の中に、時間の感覚質が宿っていることに気づかされたのは初めてであったし、何よりも、そこで表現されている時間の流れに自分が引き込まれていった現象には驚かされた。絵画作品を見て、時の感覚を失うというのは、このように、時間の感覚質を見事に表現した作品が持っている共通の性質なのかもしれない。

印象に残っている作品を挙げればきりがないのだが、もう一つだけ挙げるとするならば、それは、ピーター・ルーベンスとヤン・ブリューゲルの共同作品「エデンの園と人類の堕落」だろう。表現されているモチーフやそこに込められた意味に関しても興味深い作品だったのだが、この作品が二人の偉大な画家の共同作品であることに驚かされた。

作者の名前を確認することをせずに作品を眺めており、途中から音声ガイドの解説を聞いた時に、この作品が二人の共同で創られたものだということを知ったのだ。ルーベンスとブリューゲルが、お互いの画家としての技術を共有し合いながら、優れた作品を世に生み出したことに対して、なぜだか励まされるものがあった。

知性発達科学に関する研究者として、二人の作品のように、他の研究者と共同して、時空を超えた普遍性を宿す作品を生み出す日が来るのであろうか、ということに思いを馳せていた。マウリッツハイス美術館を後にした時、静かに自己の内側の深くへ入っていく、あの感覚に包まれていたのであった。

526. 視覚の魔術師マウリッツ・エッシャーとの邂逅：エッシャー美術館にて

デン・ハーグを訪れる計画を立てていた時に、その街にあるエッシャー美術館には必ず足を運ぼうと思っていた。私が現在住んでいるフローニンゲンからわずか数十キロ西にある街、レーワールデンで生まれたエッシャーとの最初の出会いがいつであり、どこだったのかは定かではない。しかしながら、ある時から、エッシャーが残してきた作品に強い興味を示すようになっていたのは確かである。実際に、昨年日本に滞在していた際に、エッシャーの画集を購入しており、時折それを眺めている自分がいたのだ。

エッシャーの魅力を一つ選ぶとするならば、それは、彼が肉体の眼だけではなく、心の眼や精神の眼を通じて、この世界を眺めていたことにあるだろう。エッシャーの作品は、私たちの肉体の眼を錯覚に陥れるかのような特徴を持ったものが数多くあるだけではなく、それらの作品は、実は私たちの心の眼や精神の眼を大いに揺さぶってくれるものだと思うのだ。サルバドール・ダリと同じように、このリアリティを独特な方法で眺めているエッシャーは、私のお気に入りの画家の一人である。

フェルメールやレンブラントの作品をマウリッツハイス美術館で鑑賞した後、私はその場を離れることを少し惜しみながらも、エッシャー美術館に向かって歩き始めた。未知なる街を歩くのは、新たな発見や気づきが内側から湧き上がってくるため、歩く行為そのものが実に楽しい。少しばかり大きな通りに出てみると、デン・ハーグの街を走る路面電車と遭遇した。私の歩みと逆方向に路面電車が通り過ぎていった。私は思わず振り返り、路面電車の後ろ姿を眺めていた。路面電車のように、定められた道を正確に歩くことができない人間の一生について、考えさせられるものがあったのだ。

通りと通りの間にある運河を架橋する橋の上に差し掛かった時、複数の白いハトが空を舞っているのが見えた。ハトが舞っている姿は、路面電車の動きとは対照的に、予想のつかないものであった。デン・ハーグの街並みを眺めながら歩みを進めると、一つの並木道に差し掛かった。その並木道の果てに、エッシャー美術館がたたずんでいるのが見えた。紅葉が終わりかけている並木道を歩く私の心境は、とても高揚したものであった。

なぜなら、終わりかけの紅葉とは裏腹に、これからエッシャーとの深い出会いが待っていると予期されたからである。エッシャー美術館の入り口に到着すると、オランダ王室が所有していた邸宅を美術館にしたというのがわかるぐらい、独特な気品を兼ね備えている美術館がそこにたたずんでいた。館内に足を踏み入れた瞬間、「ハーグ市立美術館」には行かず、エッシャー美術館をじっくりと味わう必要性がある、と直感的に気づいた。この美術館では、エッシャーの作品や関連資料を見ることができるだけではなく、エッシャーの作品が体現している世界を体験できるような工夫が凝らされていた。

展示されている作品の一つ一つがどれも興味深かったのであるが、空間の中に無限を表現し、時間の中に永遠を表現した作品は、特に自分の関心を引くものであった。中でも、『発展』『メタモルフォーゼ（変容）』『もう一つの世界』には、特に時間をかけて鑑賞していた。やはり、優れた芸術家は、鑑賞者を違う世界に引き入れていくという魅力と魔力を持っているのだ、とつくづく思った。有限な存在である人間が生み出すものの中に、無限性と永遠性が宿り得るというのは、実に神秘的なことだと思うのだ。

エッシャーとは分野は違えど、一人の表現者として、自分の作品の中に無限性と永遠性を具現化させる方法を探求していきたいと強く思わされた。科学者として再現性を追いかけるよりも、一人の表

現者として無限性と永遠性を追いかけたいと思う自分を捨て去ることは決してできない。そうした想いこそが、自分の日々の仕事や活動を根底から支えるものになっているのだ、と思うからである。

【追記】

この時はまだ作曲実践を始めていないのだが、当時から科学研究のみならず、芸術行為を示唆するような表現活動にも関心を示していることがわかる。とりわけ、そうした表現行為を通じて無限や永遠を具現化させることに関心を示している自分がいることが見て取れる。フローニンゲン:2018/3/23(金)18:13

527. 20年の歳月を経て:国際司法裁判所との再会

エッシャー美術館を後にした私は、最後にどうしても足を運んでおきたい場所に向かって歩き始めていた。それは、デン・ハーグに本部を置く国際司法裁判所だった。国際司法裁判所の存在を始めて知ったのは、小学校高学年の時である。社会科の時間に、何気なく資料集のページをめくっていた時に目に飛び込んできたのが、デン・ハーグにある国際司法裁判所の写真だったのだ。

その時の情景は、実に鮮明な記憶として私の頭の中に残っている。小学校の半ばあたりから、法曹を志していた私は、「国際司法裁判所」という名前とその写真が醸し出す何とも言えない魅力に取り憑かれていた。当時の私は、国際司法裁判所がこの国際社会で果たす役割を正確に把握していたとは到底思えないが、「とにかく、自分は将来ここで働いているのだ」という根拠のない確信に包まれながら、社会の資料集を眺めていたことを思い出す。

それから20年弱の月日が経った。国際司法裁判所の判事ではなく、知性発達科学者として、今この瞬間にデン・ハーグの街にいることが、不思議で仕方なかった。大通りの運河沿いを歩きながら、国際司法裁判所に向かっている途中で、鮮やかな夕焼けを発見した。それはまるで、ホログラム映像のような夕焼けであった。小学生の頃のあの時の私は、この美しい夕焼けを見ることを知っていたのだろうか。

おそらく、知るすべはないだろう。しかしながら、あの時の私は、将来の自分が必ずこの地に来ることを知っていたであろう。そのようなことを考えていると、今私の眼の前で鮮やかな美しさを放ってい

る夕焼けは、現在の私の眼を通して眺められているものではなく、幼少時代のあの時の自分の眼を通して眺められているかのような感覚に陥ったのだ。

国際司法裁判所に一歩一歩近づいていくに従って、自分の内側の感覚が一歩一歩、幼少時代の自分の感覚に近づいていくのがわかった。国際司法裁判所の姿が見えた時、冬のデン・ハーグの空の下で、私は息を呑み、その場で立ち止まらざるを得なかった。これは、国際司法裁判所が放っている威厳さに触れたというよりも、幼少時代の私がこの地に張った結界の境界線に触れた感覚があった。結界の境界線を確認し、そこから結界の中へ一歩一歩足を進めていった。

その一歩一歩の中に、この20年間で経験してきたことの全てが内包されているかのようであった。国際司法裁判所へ近づいていく一歩一歩を通じて、私は20年間の自分の内側の進歩を確かに感じ取り、同時に、変わらないものを確認するかのようであった。

国際司法裁判所の左手に、大きな時計塔が見える。時計塔の上に広がる雲ひとつないデン・ハーグの夕焼け空に、一筋の飛行機雲が走っているのを確認した。時計塔に掲げられた時計の針が巻き戻り、私は超越的な時間感覚に引き込まれていった。同時に、飛行機雲のシンボルが、超越的な空間感覚を私の中に生み出しているようであった。しかし、そうした超越的な時空感覚の中、私の存在は紛れもなく、今この瞬間の時空間内に定位していることをありありと感じていた。

真に時空を超越するというのは、実は今この瞬間の時空と一体化することなのではないかと思わされた。そのような超越的な感覚に包まれたまま、私は何も考えることもなく、ただただ国際司法裁判所を眺めていた。

【追記】

この日記を改めて読み返すことによって、国際司法裁判所を訪れたあの時の記憶がありありと蘇ってきた。そこにはあの時に漂っていた匂いや見た色さえもが鮮明に記憶として蘇るかのようだった。この瞬間にあの時の感覚を新たに体験できるというのは、国際司法裁判所を訪れたことは過去の出来事ではなく、たった今の出来事でもあるのだと思った。幼少時代に国際司法裁判所に張った結界は、今この瞬間にも生きている。フローニンゲン：2018/3/23（金）18:20s

528. 国際司法裁判所からの出発

国際司法裁判所の門前で、私は時計塔と平和宮をただただ眺めていた。帰りの列車の時間が迫ってきていることに気づいたのは、しばらく経ってからのことだったと思う。フローニンゲンへの直行便に乗るためには、ここで国際司法裁判所と別れなければならなかった。時計塔と平和宮を背にし、デン・ハーグ中央駅に向かおうと思った瞬間に、後ろ髪を引かれるような感覚があり、私は最後にもう一度、それらの建造物をただただ眺めていた。

国際司法裁判所を出発しようと思って、中央駅に向かって歩き始めた時、それが文字通り、自分の新たな出発であることに気づいた。今日、この瞬間に、デン・ハーグの国際司法裁判所を訪れるまでは、そこに足を運ぶことが、自分の中での何かの終着地点だと思っていた。しかしながら、それは完全に誤りであることに気づいたのだ。国際司法裁判所に足を運んだことは、何かの終着を意味するのではなく、そこからの出発を意味しているということに気づかされたのである。

まさに、国際司法裁判所から、私の内側の新たな展開が開始されたことを知る。私たちの内側では、いついかなる時にも、新たな出発が始まっているのだ。私たちの人生は、出発の連続であり、結局のところ、終着地点など存在しないことに気づかされる。

デン・ハーグを訪れた今日の旅は、一日という短い時間のものであったが、これほど重要な意味を持つ旅もなかなかないだろう。デン・ハーグ中央駅へ向かう最中、私の頭の中では、今日訪れた二つの美術館の記憶と国際司法裁判所での記憶が渦巻いていた。これらの記憶が、真に自分の経験として昇華される時、私はさらに前に進むことができるだろう。デン・ハーグからフローニンゲンへの列車の中、私は今日の体験をただただ反芻していた。列車の窓から、暗闇の中で光を灯す車や建物が見える。

それらのものが過ぎ去っていくのを眺めながら、今日の体験の多くは、この過ぎ去る景色のように、自分の内側を通り過ぎて行ってしまうのだろうと思った。だが、今日の体験のごく少数のものが、自分の内側で経験の形としてろ過されるのであれば、それでいいと思った。経験としてろ過されたものが、私の内側で強い光となってくれるのであれば、それ以上望むことは何もないだろう。今日この瞬間から、また歩き始めたいと思う。

【追記】

この日記で述べているように、確かにあの日の体験の多くは過ぎ去る景色のように、内側からどこかに過ぎ去っていった。しかし、当時の私が指摘しているように、あの時の体験が一つの経験という全体に昇華されたこともまた正しいように思える。それは本当に今の自分の内側を照らす強烈な光になっている。もしかすると、時折私が知覚する光に包まれる体験というのは、自らが歩んできた経験の総体を知覚しているのかもしれない。フローニンゲン：2018/3/23（金）18:26

529. 内側の灯火と超常現象

今朝、目を覚ましてみると、昨日と同様に、書斎から見える大通りに霜が積もっていることに気づいた。外は完全に冬景色である。そうした外の寒さとは対照的に、自宅の中は非常に暖かい。こうした外と内とのコントラストは、ニューヨークに在住していた時と状況が似ている。しかしながら、両者ではっきりと異なるのは、それを体験している自己そのものだろう。

ニューヨークに住んでいた頃の三年前の私は、冬という季節に飲み込まれる形で、日々の生活を形作っていたように思うのだ。つまり、その時には、冬という季節の中で着実に育まれていく内面的成熟に気づくこともなく、冬という季節を何気なくやり過ごそうという気持ちすらあったように思える。確かにそのような生活の中でも、内面的成熟の芽が誕生していたのかもしれないが、結局、それらは認識という光と養分を得ることができなかったために、餓死してしまったのだと思う。内面的成熟を促す機会を無数に喪失してきたという経験を振り返ってみると、わずかばかり自分の中で進歩が見えるのは喜ばしいことである。

フローニンゲンの街で生活を始めることによって、冬という季節を超越した冬があるということに気づくことができたし、そうした超越的な冬の中にある自己と対話をすることでしか、私はその次に開かれる自己に到達しえないのだということを知った。

冬が深まるある日の夜に、自宅の電気を消灯し、ロウソクに火を灯したことはあるだろうか。私の自己は、小さな光を放ちながら静かに揺らめくロウソクの灯火のようである。いや、それよりもむしろ、デン・ハーグの国際司法裁判所で見た、決して消えることのない「平和の火」のようである。絶えず静かに揺らめくこと、絶えず静かに燃え続けることが何より重要なのだと思う。

今日は午前中に、研究プロジェクトを前に進めていた。フローニンゲンからデン・ハーグに向かう列車の中で閃いたアイデアをもとに、研究データを眺めていた。そのアイデアがうまくいく箇所と、やはりまだうまくいかない箇所がある。あるアイデアが生まれることによって、既存の問題が解決し、同時に新たな問題が生まれるというのは、どれほど不思議な現象だろうか。そして、そうした新たな問題が、私たちをさらに前進するように促してくることも驚くべきことだと思う。

まさに、発達心理学者のロバート・キーガンが述べているように、私たちが問題を解決するのではなく、問題が私たちを解決するのだ、ということを思い知らされる。言い換えるならば、私たちは問題を解決することによって成長するのではなく、問題が私たちを解決することによって、私たちは成長していくのだろう。

午前中の仕事を終えた後は、外の寒さとは関係なく、習慣にしているランニングを行いにノーダープラントソン公園へ出かけた。ランニングの途中、突如として、冷たいみぞれが降ってきた。日常の何気ない現象は、実は全て超常現象なのではないかと最近よく思う。みぞれが落ちてくることに気づいた私は、デン・ハーグからフローニンゲンへ戻る列車の中で見舞われた、ある種の放心状態に陥っていた。そうした放心状態の中で、自分は果たして存在しているのか、そして実在しているのか、という根源的な問いにぶつかっていた。

こうした形而上学的な問いは、決まって日常の何気ない現象から生み出される。そうしたことを考えると、日常の何気ない現象は、超越的な問いを常に内包しているがゆえに、全て超常現象なのではないかと思うのだ。

オランダで生活を始めて以降、日常の何気ない現象は、どれも皮が剥けた状態で私と対面し、超越的な問いを露わにした裸体で自分に迫ってくるのがわかる。現象の原初の姿と真摯に向き合う時、自己の原初の姿を発見することに近づけるのかもしれない。耐えながら、揺らめきながら、絶えず静かに歩み続けることによってしか、それを成し遂げることはできないだろう。2016/11/14

530. 燃焼過程を通じた成熟

「もうそんなことは止めたほうがいいのではないか」という声が聞こえてきた。午前中の仕事を終え、身体トレーニングの後に昼食を済ませ、一時間ばかり仕事をさらに行ってから、いつものように20分間ほど昼寝をしていた。昼寝というよりも、実際には、ヨガのシャバーサナのポーズを20分間ベットの上で行うという瞑想実践なのだが、時折この実践は、啓示的な伝言を私に伝えてくれる。少しばかり昔――数週間前――のことになるが、当時の私は、読書という行為についてあれこれと考えを巡らせていた。

今日、瞑想的な意識状態の中で、イマニュエル・カント本人から、「もうそんなことは止めたほうがいいのではないか」という言葉をかけられた。この言葉が示唆しているのは、カントを代表とした哲学者の思想を頭に入れようとすることに対する警告だろう。哲学者の思想内容を追いかけ、単にそれを記憶するために行う読書というのは、非常に不毛なものだと思う。不毛であるばかりか、それは自らの思想を紡ぎ出す際の障害にすらなりうると思っている。当然ながら、偉大な哲学者の思想に触れることは重要である。

その時に注意が必要なのは、決して他者の思想を安易に移植することではなく、他者の思想を通じて、自らの思想を育んでいくことである。他者の思想を移植することに懸命な人の言葉は、常に浅薄である。その言葉の裏に、その人固有の顔が見えることはなく、移植対象となった思想家の顔が歪んで見えるのだ。懸命に他者の思想を移植することに躍起になった結果、自らの顔を喪失するというのは、とても恐ろしいことではないだろうか。

少なくとも私は、自分固有の顔を隠す形で、他者の歪んだ顔をまといながら生活することに耐えることはできない。とりわけ思想に関して、移植行為は不毛なものであり、成功することはないと思うのだ。なぜなら、思想というものは本質的に、一人の個的な体験と経験を通じて生み出される唯一無二のものだからである。また、思想移植に励むことは、自分固有の生の価値を貶めることにもつながると思うのだ。思想移植を行うためには、自分独自の生を脇に置き、他者の生を生きなければならないからである。おそらく、カントが伝えようとしていたのは、そのようなことなのだろう。

これは何も、哲学書を読むという行為だけに当てはまることではなく、研究論文を読む際にも当てはまることだと思う。読書の最中、自分の内側を通して書物や論文と向き合っているのかどうか、という度合いがかなり掴めるようになってきている。そして、そうした度合いが測定できるようになってくると、驚くのは、多くの読書行為が自分の内側を適切に通過していない、ということである。自分の内側を通過していない読書は、自己の内側で何も生み出さないばかりか、移植行為による自己展開の機能不全や成長抑圧を生じさせる。

自分の内側を通過していない読書体験は、本来言葉が持っている自発的に意味を広げる力、すなわち自己展開力を骨抜きにしてしまうのだ。そのような読書体験を重ねれば重ねるだけ、成長を抑圧する脂肪が蓄積する。脂肪にまみれた状態に気づくことがまず大事であり、そこから自分の内側で自己展開する力の機能を回復させる試みが重要になるだろう。このようなことを考えると、自己展開力を促すことが、読書の最大の意味なのではないかとすら思う。

書物に書かれた内容や思想を溜め込むというような、脂肪を蓄積することに邁進する行為は、決して読書の本来の姿ではないだろう。読書の本来の姿は全く逆であり、兎にも角にも燃焼だと思うのだ。そのような燃焼過程の中で、私たちの体験や経験が熟成していくのである。その結果として待っているのが、内面の成熟というものだろう。日常の何気ない現象から燃焼を引き起こし、自分の考えを展開させているように、哲学者の思想から燃焼を引き起こし、自分の考えを展開させていく必要がある。

531. 変化の粒子

今日は、仕事の間中ずっとジョージ・ウィンストンのピアノ曲を流していた。69曲のピアノ曲の合計時間は4時間15分ほどであるため、全ての曲を少なくとも二回聴いていたことになる。夜の八時を回ると、ジョージ・ウィンストンが編曲をした「カノン」を延々と繰り返し聴いていた。ある時から仕事の手を止め、ウィンストンのカノンにただただ耳を傾けていた。

一つの曲を繰り返し聴けば聴くほど、真剣に向き合えば向き合うほど、新たな体験が自分の中で生じることに気づく。これは、一つの言葉や概念、そして理論といった類のものと真剣に向き合う際に生じる現象と全く同じである。一つの対象と真剣に向き合うたびに、自分の中で何かが確実に変化

するのだ。音楽や言葉の外観は変化をしていないはずである。一つの固定的な対象物から新たな意味や体験を見出すということが起こるのは、まさに私たちの内側に変化があるからに他ならないだろう。

今の私は、顕在意識下のみならず、潜在意識下においても絶えず生じている変化を取りこぼすことがない。絶え間ない変化は、一人の人間存在が内在的に宿している不可避の特性である。変化の粒子は、四六時中、私たちの内側を流れていることに気づかないだろうか。私たちの内側に無数の変化の粒子が流れていることだけではなく、私たちの存在自身が、それらの粒子を運ぶ流れだとわかったら、それは驚くべきことではないだろうか。

同時に、それら一つ一つの流れが各人固有のものであるとわかった時、それらの流れをせき止めようとする外界の悪意ある力に対して、憤りを感じざるをえないのではないだろうか。私が日々の生活の中で感じている憤りは、まさにそれである。

今日も午後から、少しばかり論文と専門書に目を通していた。「私たちは、自分の中にすでにあるものしか書物から読み取ることができない」というマルセル・プルーストの言葉通り、今日の読書から汲み取ることができた意味は、まさに今の自分の中にすでにあるものだったのだろう。プルーストの言葉は、書物から汲み取れるのは、現在の自分の中にあるものでしかないため、書物を読むことは無意味である、ということを意味していない。今日の読書から汲み取ったのは、おそらく、自分の内側にある変化の粒子である。

変化の粒子の興味深い特性は、それが認識の光に当てられた時に初めて、一つの変化として自分の内側で開くことである。つまり、書物を読むことの意味は、自分の内側の変化の粒子を掴むことであり、それによって変化の流れ自体を新たなものにしていくことである。こうすることによって初めて、内側から変化の促しが私たちにもたらされるのだ。その結果として、私たちは新たな流れを持つ自己となるのだと思う。

絶えず変化の粒子を掴み、絶えず変化の流れとしての私を認識しながら、毎日を新たに出発していくこと以外に、自分の生き方はない。せき止められない流れこそ、人間の生の本当の姿なのではないだろうか。

© YOHEI KATO 2018

532. キーガンとウィルバーからの脱却と回帰

オランダでの生活で一つ厄介なのは、アマゾンで注文した書籍が到着することが遅いことである。物流面のシステムがそれほど整備されていないからなのか、注文予定日よりもだいぶ遅くに書籍が到着することがあったり、書籍のロスト率も米国や日本で生活をしていた時に比べると、格段に高い。ある地点から別の地点に書籍を紛失することなく輸送するというのは、それほど難しいことではないと思うのだが・・・。

本日、郵便受けに書籍が届いていることに気づき、おそらく先日注文した書籍のうちのどれかだろうと期待していたのだが、なんと二ヶ月前に届くはずであった書籍が、ベルリンからはるばる本日届けられた。到着予定日を一ヶ月過ぎた頃に、販売者に返金の依頼をし、すでに英国のアマゾンから新品を購入していたため、全く同じ中身の分厚い専門書を二冊保持することになってしまった。アメリカで生活をしていた四年間において、注文した書籍が届かなかったことは一度もなかった。

昨年、日本にいた時は、海外から専門書を注文した時に、一度か二度ほど書籍が届かず、返金の依頼をすることはあったが、いずれにせよ返金依頼は基本的に稀であった。少なくとも、日本にいた時は、注文予定日の前後数日以内に、確実に書籍が届いていたのだが、オランダでは注文予定日からだいぶ遅れて書籍が届くことの方が通常である。“Thinking in Complexity (2007)”という500ページほどの専門書の一冊を、複雑性科学に関心のある知人に贈呈しようと思う。

先日、「書くこと」について、また別の側面にふと気づくことが起こった。拙書『なぜ部下とうまくいかないのか』を執筆した際に思っていたことは、ロバート・キーガンの発達理論を中心に文章を書くということは、自分がキーガンの理論から離れることを意味している、ということであった。つまり、長らくキーガンの理論を学んでいた私にとって、キーガンの理論を中心にして書籍を執筆するということは、キーガンの発達理論から脱却するための儀式的な側面があったのだ。アメリカの思想家ケン・ウィルバーの発達理論にせよ、キーガンの発達理論にせよ、二人の発達理論はともに、質的に奥深いものがあるのは間違いない。

しかしながら、最先端の知性発達科学の研究において、キーガンの理論が適用されることはほとんどなく、ウィルバーの発達理論においては皆無である。キーガンやウィルバーの発達理論は、現在

においても色褪せない力を持っていることは間違いないが、それらだけを学んでいては、知性や能力の発達現象に関して、かなり多くのことを見過ごすことになるのは確かである。どのような理論体系にも当てはまることだろうが、一つの理論体系のみを学んでいる最中は、その理論体系が持つ物語に私たちは絡め取られてしまうため、その理論が持つ限界に対して盲目的になってしまいやすい。

キーガンやウィルバーの理論体系の大きな問題は、その物語が非常に奥深く、かつ非常に魅力的なものに映るため、多くの人は一度その物語の虜になると、そこから脱却することがほとんどできない、ということにあるだろう。実際に私自身も、彼らの物語を強く信奉している時期が数年以上にわたって続いていた。

そこから、キーガンよりも遥か以前の偉大な発達論者たちの理論にまで遡ることや、最先端の発達科学の研究論文に触れることによって、徐々にキーガンやウィルバーの物語を客体化させることができるようになったのだと思う。そうした客体化の末に、彼らの物語を盲目的に信奉するということから脱却できたように思う。そうした脱却作業の一つの形として、あの書籍を執筆したのだと思う。不思議なことに、あの書籍を執筆することによって、キーガンやウィルバーの理論と離れることができたのだが、同時に、彼らの理論がこれまで以上に自分の内側に入ってくるようになったのだ。

書くことというのは、まさに対象から離れることを私たちに促すと同時に、対象から離れることによって、対象の本質に再び接近させるという力を兼ね備えているようなのだ。この構造は、自己を対象化させる試みの後、再び自己に帰還した際に、自分の内側のより深くへ迫っていくことができることと同じである。

533. エッシャーの『発展』という作品より

デン・ハーグのエッシャー美術館で鑑賞した幾つかの作品の印象が色濃く脳裏に焼き付いている。一つは、『発展（development）』という作品である。発達科学を探究している者として、この作品のタイトルを『発達』と呼びたいところだが、最初に翻訳した方が『発展』と命名しているので、それを尊重しようと思う。実際には、エッシャーの『発展（development）』という作品は二つある。どちらの作品

にも共通なのは、まさにエッシャーが生物進化の根本原理をそこで表現しているということである。それは何かというと、「差異化」と「統合化」である。

この根本原理は、人間の知性や能力の発達にも等しく当てはまる。それを証明したのが、まさに発達心理学者のハインツ・ワーナーの功績だろう。エッシャー美術館でこの作品を目撃した時、思わずその場で立ち止まり、この作品をじっと凝視していた。凝視を続けていると、私はこの作品に対して、めまいのようなものを催してしまったのである。なぜなら、この作品には、無限かつ永遠なる差異化と統合化の過程が描き出されていたからである。

私たちの発達は、空間的に無限であり、時間的に永遠であるということを知った時、誰が正常な感覚でその事実を受け止めることができるだろうか？さらに、この作品の中央には、発達の始点である「アルファポイント」が何気なく表現されている。ここから私は、エッシャーが何気なく──おそらく意図的に──描いた発達のアルファポイントを起点として、無限かつ永遠なる差異化と統合化の極地について思いを馳せずにはいられなかったのだ。「無限」かつ「永遠」である発達過程に極地を見出そうとすることは、荒唐無稽に思えるが、発達の極地である「オメガポイント」について考えざるをえなかったのである。

発達のアルファポイントとオメガポイントは、両者別々のものでありながらも、それらは同じ地点に位置しているように思える。意識の発達が極地に到達すると、それはアルファポイントに帰還するのではないかと思うのだ。ただし、注意しなければならないのは、フロイトとユングが陥った過ちに陥らないことである。つまり、フロイトのように、高次の発達段階の現象を低次の発達段階の現象に還元してはならない。また、ユングのように、低次の発達段階の現象を高次の発達段階の現象に還元してはならない。

要するに、オメガポイントを通過した後に到達するアルファポイントは、当初のアルファポイントとは歴然とした差がある、ということである。このようなことを考えると、発達とは退行することでも前進することでもなく、本質は帰還することである、と言えるのではないだろうか。こうした考えはまるで、プラトンの認識論の根元にある「想起（思い出すこと）」を彷彿とさせる。想起という継続的な実践の果てに、オメガポイントが待っており、そこで私たちは初めて意識の本質に至るのではないだろうか。

© YOHEI KATO 2018

534. ミクロ・メソ・マクロな発達

昨日は、これまで執筆した文章を読み返し、編集作業を行っていた。気がつくと、過去に投稿した記事のうち、200近くの記事が未編集のままになっていたのだ。昨日の夕方から、三ヶ月前の記事をいくつか読み返し、追加・修正を文章に加えていた。すると面白いことに気がついた。三ヶ月前のそれらの記事は、ちょうど私が欧州小旅行に出かけたあたりのものである。

興味深かったのは、三ヶ月前の自分はもはやこの瞬間にはいない、ということであった。内面世界の絶対座標において、現在の私の位置と、三ヶ月前の自分の位置が異なることに気づいたのである。つまり、この三ヶ月の間に、自分の内面世界の中で確かな変化があったことを掴んだのである。

文章を読み返しながら、自分はもうそのような場所にはいないことを知った。三ヶ月という時間軸は、発達科学の中においては「メソ」な時間に該当する。この三ヶ月間の中で、私がメソな発達を遂げていたということに気づけたことは、喜ばしい。こうしたメソな発達が起こった要因は、やはり文章を書き続けたことが挙げられるだろう。外面世界との交流から生じる内面世界の現象を絶えず書くことによって、私はそれらの現象を掴みながら離れることができたのだと思う。

内側の現象を言葉によって捕まえることによって初めて、それを手放すことができる。そして、手放した先に、新たな自己展開が生まれるのだ。まさに、私にとって、文章を書くことの意義はそこにあるのだと改めて思った。自己展開を継続させながら、自己と他者に深く関与していくこと。文章を書くことを抜きにして、そのようなことが実現されるとは到底思えない。永続的な自己展開と、自己と他者への深い関与の中に、自分の人生があるのであれば、文章を書くことが自分の人生を最大限に生きることなのだと思う。

編集作業を続けていると、メソな発達のみならず、もう少し時間間隔の短い発達現象が時折見られた。それは、数日単位のミクロな発達である。このミクロな発達は非常に捉えにくいのだが、自分の文章を丹念に読んでいると、数日を単位として、自分の中で何かが着実に深まっているのがわかる瞬間がある。数日前に取り上げていた対象に対して、新たな洞察を持って文章を書いていることや、同じテーマに対する自分の考えが、わずかではあるが深まっているのを発見することがある。これらは、ミクロな発達現象と呼んでいいだろう。

このようなミクロな発達現象が着実に積み重なり、メソな発達現象を引き起こしているのだと思う。そして、そうしたメソな発達現象があって初めて、年単位でのマクロな発達がもたらされるのだろう。マクロな発達を創出するためには、ミクロな発達を創出していくことが不可欠であることを、私たちは忘れてはならないだろう。この点は、ダイナミックシステム理論の根本原理と密接に繋がっている。

それは何かというと、私たちの知性や能力というのは、前の状態を受けて次の状態を生み出すということである。要するに、ある時点における状態は、次の状態を生み出すのに不可欠であると同時に、それに影響を与えるということである。上記のように発達現象を大きく三つに分けて眺めると、ミクロな発達があって初めてメソな発達が生まれ、メソな発達があって初めてマクロな発達が生まれる、と言い換えることができるだろう。ここからわかるのは、ミクロな発達の重要性である。

思うに、日々のミクロな発達をどれだけ自分の中で認識し、どれだけそこに意志を持って関与していくかに、発達の最大の鍵があるのではないか。多くの人々は、マクロな発達ばかりに焦点を向けているが、彼らが内面的成熟を一向に遂げることがないのは、日々のミクロな発達を自らの手で掴もうとする意志も実践もないからだろう。

【追記】

この日記が書かれた当時、未編集の記事は200本だったそうだ。現時点において、未編集記事は1700本を超えている・・・。編集の遅滞を防ぐために一つの工夫を思いつき、数日前よりそれを実行し始めた。また、この一週間の間に再び過去の記事を編集しようという意思が芽生えたため、なんとか1700本を超える記事の編集を進めていきたい。毎日20本の記事を編集することが限界のようであり、それができない日もあるであろうから、1700本を超す記事を編集するにはかなりの日数を要するだろう。だが、それでも必ず全ての記事の編集をやり通す。

上記の日記を改めて読んでみると、当時の私がミクロやメソな発達を実感していたことがわかる。当時の記事を今読んでみると、そこから現在にかけてのマクロな発達を認めることができる。今から一年半前の私は、すでに含んで超えられている。そうしたことを明確に確認することができたのは、このように日記を絶えず書き留めていたからだろう。自己の存在記として日記を書き続けることがなければ、メソな発達につながるミクロな発達を見落としていただろうし、マクロな発達につながるメソな

発達を見落としていただろう。日記を書く意義というものを改めて実感し、このようにして過去の日記を読み返すことの意義も改めて実感する。

また、文章を書くことが自分の人生を最大限に生きることであり、それが他者とこの世界への関与につながるという考えは今でも同じだ。さらに、多くの人がマクロな発達ばかりに焦点を向ける傾向があり、メソやミクロな発達をないがしろにする傾向があるという指摘もここ最近も行っていたように思う。「多くの人が内面的成熟を一向に遂げることがないのは、日々のミクロな発達を自らの手で掴もうとする意志も実践もないからだろう」という発言に異論はない。フローニンゲン：2018/3/23（金）19:49

535. 内なるダイモーンと絶えない灯火

異国の地で、終わりのない彫刻作品を作り上げることに毎日従事しているかのような感覚がある。彫像を掘り進める時、打ち間違えや上手く掘り上げられないことがあるのはやむを得ない。重要なことは、ただひたすらにそれを掘り続けていくという行為なのだろう。より正確には、そうした行為の最中で深まる彫像と自己を同時に把握していくことだろう。作品と自己の両者を共に深めていくために、私は掘り続けていかなければならない。まさにそれを行うために、こうした異国の辺境の地に来たのだ。

昨夜、就寝前に、自分の内側から再び声が聞こえていた。この声はいつも私をさらに駆り立てようとする。私の日々の探究の量や質に対して、いつもこの声は「話にならない」としか言葉を発しないのだ。これまでの私は、この声に飲み込まれる形で、時に探究活動を激しく前に進めようとしたこともあった。しかし、往々にして、一過性の熱を持って何かに向き合おうとすると、そこには継続性がないのだ。

自分の仕事を絶え間なく継続させていくことの中に、私は価値を見出している。昨夜、内なる声が聞こえてきた時、私は一切の聞く耳を持っていなかった。だが間違いなく、そうした声によって、自分が揺さぶられているのを感じていた。実際に、その声が聞こえてから、寝室を飛び出し、再び仕事に向かおうとすら考えていたのだ。結局、私はその声を押し殺す形で、就寝についた。一夜明けてみると、自分の内側で余分なものが削ぎ落とされているかのような、清々しい感覚が身体と精神の中に広がっていた。

起床直後、書斎の窓から見えた冬の小雨は、私の中の余分なものをさらに洗い流してくれるかのようであった。爽快な気持ちの中、ふと昨年日本にいた時に知覚したもっとも印象的なビジョンについて思い出していた。あの時も、昼食後しばらく経ってから、ヨガのシャバーサナをしていたことを思い出した。その時に知覚したのは、イメージを生み出す深層意識のさらに奥深くにまで入り込み、強烈な原形色を伴ったあるビジョンであった。

それは、私の自我の諸々の側面が無数の下等生物となり、それらが灼熱の業火で焼き尽くされるというものである。自分の脳と意識が、このような非常に残酷なビジョンを創出しうるということにも驚いたし、そのビジョンが持つ原形色の鮮やかさにはさらに驚かされたのを覚えている。振り返ってみると、この灼熱の業火そのものが私を象徴しているのではないか、と思ったのだ。いやむしろ、その業火は、私の内側にいるダイモーンを表しているのではないか、と思わされたのである。そのように考えると、非常に合点が行く。

昨日の声の主は、まさにこのダイモーンだったのではないだろうか。精神分析学的な説明を加え、それを自分のシャドーと捉えることができるかもしれないが、その存在は、自分の単なるシャドーではないことが歴然とわかる。自分の内なるダイモーンを発見できたことは、極めて大きな意味を持つ。これまでの私は、そのように強大なエネルギーを持ったダイモーンの存在に気づかなかったばかりか、その存在を抑圧しようとさえしていたのである。

「話にならない」という言葉は、私の日々の探究について言及していたというよりも、内なるダイモーンに気づけないほどの内面の未成熟さに対して発せられたものだったのではないか、と思うのだ。ダイモーンからの目覚めの言葉と促しによって、私はようやく自分のダイモーンを見つけることができたのだ。内なるダイモーンを発見した後に待っていたのは、一過性の燃焼ではなく、絶えることのない内なる灯火であった。

536. 真冬のほふく前進

どんよりとした雲が空を立ち込め、小雨が降る形で、今日という一日が始まった。昼食後、少し仕事をした後に仮眠をとって目覚めてみると、雲の間から太陽が顔を覗かせていた。太陽を取り囲む雲も、黒い雨雲から白い雲へと変化を遂げていた。先週から、フローニンゲンの街の最低気温はマイ

ナスに突入することが多くあったが、昨日あたりから来週にかけては、少し暖かい日が続くようである。それはまるで、冬の中休みである。書斎の窓を開けてみると、冬の冷たい風が、爽やかな息吹として部屋の中へ流れ込んできた。雲間から降り注ぐ太陽光とそよ風を浴びながら、改めて、今この場所にこのようにしていられることを有り難く思った。

以前訪れたデン・ハーグでの体験を先日紹介していたように思う。その中で、「デン・ハーグからの出発」ということがテーマに上がっていた。私たちの人生が本質的に持つ、連続的な出発現象に関する話である。思い返すと、以前にも、「出発」ということをテーマにして、何か文章を書いていたように思う。その際には、往々にして、出発を促すきっかけになる出来事があった。例えば、先日の例で言えば、デン・ハーグという未知なる街を訪れることなどである。

しかしながら、先ほど寝室での仮眠を終え、書斎に戻ってきた時、そこでも出発という現象が起こっていることに気づいたのだ。つまり、何か特定の現象をきっかけにすることなく、私の内側で絶えず出発という現象が起こっていることに気づいたのだ。ミクロな発達現象よりも遥かに微小な変化を捉えられるようになっている自分がいるのかもしれない。刹那の中に生じる出発は、私たちが体験する発達現象の最小単位のものなのかもしれない。絶えず出発をしながら出発地点に回帰していくという運動は、驚くべき現象ではないだろうか。

概して、私たちは常に新たなる出発をしていることを見落としてしまいがちである。私たちの内側で流れる発達の最小単位に気づくとき、常に私たちが新たな出発を体験しているということがわかるのではないだろうか。先ほどから自分の身体に当たっている太陽光はとても暖かい。冬の太陽光は不思議な力を持っているとつくづく思う。書斎からの景色を眺めながら、暖かな太陽光を感じていると、違う世界に誘われてしまうかのようである。

仕事に戻り、メールを確認すると、論文アドバイザーのクネン先生から連絡があった。なにやら、十二月と一月の研究報告会のどちらの日程で研究の途中経過に関するプレゼンをするか、という連絡であった。クネン先生からは、論文提案書と研究が順調に進んでいるため、十二月の報告会でプレゼンしてみてはどうか、と提案があった。最初からそのつもりであったため、私は十二月の報告会でプレゼンさせてもらえるように返信を送った。

© YOHEI KATO 2018

思い返せば、フローニンゲン大学に到着するまでの三年間の間、研究者としてのトレーニングを正規の大学機関で受けることができなかった私は、研究者としてのトレーニングを受けるためのトレーニングを自らに課していた。それはとても地道な鍛錬であったし、長きにわたるものであった。時に、先の見えない迷路に迷い込んでいるような感覚すらあったのを覚えている。しかし、私にできる唯一のことは、鍛錬の継続であった。

今このようにして、自分の研究や仕事に没頭できていることに対して、何よりも嬉しく思う。研究に取り組めるということそのものはもちろん、研究の中で紆余曲折を経験できることそのものが、とても有り難いものとして感じられるのだ。

先週末、森有正先生の全集に収められた『城門のかたわらにて』に目を通していた。現在、日本語に触れたくなった時は、森先生の全集をゆっくりと読むようにしている。その中で、森先生は、自身の初期の作品である『ドストエフスキー覚書』について触れていた。20年前に自分が出版した書籍を読み返した時、全身から冷や汗が出るほど恥ずかしい思いになったのと同時に、自分の進歩を確かに感じた、という趣旨の発言があったのを覚えている。

この発言を受けて、三ヶ月前に自分が書き残した文章を先日読み返した時の感覚が蘇ってきた。自分の未熟さを感じさせられるのと同時に、醜態を晒している感覚になったのだ。しかし、私は醜態を晒しながらでも前へ進んで行くことしかできないのだ、ということに気づかされた。そして、何より私を感化してきた過去の偉人たちは皆、未熟さを表に出しながらも前に進んで行くような気概を持った人間であった。泥水を飲みながらほふく前進すること以外に、前へ進む道が私に残されていないのだ、と改めて知る。光に向かってのほふく前進を今日も。2016/11/16

537.「複雑性と人間発達」コースの開始

今日は、待ちに待った「複雑性と人間発達」というコースがスタートする日である。私がフローニンゲン大学に来た最大の目的は、このコースを受講することによって、発達研究にダイナミックシステムアプローチを適用する理論的・技術的な力を高めることであった。ダイナミックシステムアプローチに習熟するためには、複雑性科学に関する理論的な知識を獲得する必要があり、さらには、コンピューターシミレーションを活用するためのスキルを獲得する必要がある。このコースは、ダイナミッ

クシステムアプローチに関する知識とスキルを獲得することを目的にしているため、フローニンゲン大学に到着してから非常に心待ちにしていた講座である。

昨日は、少しばかり仕事への投入時間が多かったため、いつもより一時間多く睡眠時間を取った。起床後、普段通りの日課を済ませ、クラスに参加するための準備をした。自宅を出発してみると、今日の気温は比較的暖かいことに気づいた。とても心待ちにしていたコースが始まるからであろうか、いつもより視線を高く保ちながら歩き、早朝のフローニンゲンの空に時折目を向ける自分がいた。大学に向かう最中の道は、私にとって、瞑想的な意識状態に入るための場と化している。

一歩一歩の足取りに自覚的であり、その一歩一歩が自分の内面世界を刺激しているのがわかる。そこから、自分自身が紛れもなく、外部の環境と内側の心理状態の相互作用によって編まれたダイナミックシステムであることに気づく。今回のコースを受講することによって、この世界に存在する無数のダイナミックシステムに関する理解を向上させるだけではなく、自分というダイナミックシステムに関する理解を向上させていきたいと思う。

つまり、このコースは私にとって、自分自身をより深く知るための羅針盤の役割を果たすと思っている。これは少し先の話になるが、このコースを全て受講し終わった時、もう私は以前の私ではなくなっているだろう、という確信めいたものがある。それぐらい、ダイナミックシステムアプローチが持っている無数の概念や理論は、私にとって大きな意味を持つものであり、それらを学習することは、大きな変容効果を私にもたらしてくれるだろう、と予感している。今日、クラスが行われる教室に向かう一歩一歩がすでに、そうした変容に向けての歩みだったことを実感している。

クラスが行われるコンピュータールームに到着すると、私が一番乗りであった。その後、インストラクターかつ私の論文アドバイザーであるサスキア・クネン先生が部屋に入ってきた。各クラスでは、前半に理論的な解説があり、後半にコンピューターを活用した実習が行われる。今回のコースは、クネン先生曰く、当初予定していた受講人数の20名を遥かに超え、35名ぐらいの受講者がいるそうである。私が到着して以降、続々と受講者が教室に入ってきた。受講者の構成は、私たちのように、ダイナミックシステムアプローチに関心のある修士課程の者や、博士課程やポスドクの者がいる。さらには、二名ほどの教授がこのコースを受講している。

各々の研究テーマは多様であるため、各人がどのようなアイデアを持ってダイナミックシステムアプローチを自身の研究に適用するか、ということにも大きな関心がある。このように、多様な関心を持つ者たちと、ダイナミックシステムアプローチを共に学習できることは、私にとって、何より喜ばしいことである。私自身、協働学習の意義を重々承知していたのだが、これまでの探究生活を振り返ってみると、どうしても同じ志を持つ者を見つけることが難しかった。だが、そのようなことは、もはや杞憂に過ぎない状況の中に私は置かれていると言える。

同じ志を持つ他者と共に学び合えることは、社会的生活を営む一人の人間として、形容できないぐらいの喜びを私にもたらしている。この時を何年待ったことだろうか。今後のクラスで期待するのは、そうした多様な受講者たちとの交流を通じて、ダイナミックシステムアプローチに関するお互いの理解を深め、当該学問領域の発展に寄与していくことである。

538. 内面世界の共有

複雑性科学と発達科学を架橋した領域については、これまで一人で学習を進めてきたため、探究の開始を知らせる鐘は、随分と前に鳴らされていたのだと思う。しかし、自分の研究プロジェクトを通じて、当該領域を真に探究することは、「複雑性と人間発達」というコースが開始されることによって、始まりがもたらされたと言えるかもしれない。

少なくとも、関心テーマを異にする多様な人たちと共に、ダイナミックシステムアプローチを探究し始める鐘の音は、まさにこのコースが始まってから鳴らされたのだと思う。そうした始まりを知らせる鐘の音は、研究者としての私のみならず、一人の人間としての私にとって、とても大きな意味を持つものだと実感している。この鐘の音の意味は、今後も継続的に探究していくべきテーマだと思う。今この瞬間に一つ言えることは、私はようやく他者とお互いの世界を真の意味で共有し始める一歩を踏み出した、ということである。

多くの人にとって、これは非常に些細なことに思えるかもしれないが、私にとっては、極めて重大な出来事である。自分の城すら構築できていないのに、他者を架空の城に招き入れることを奨励する世間の風潮に対して、辟易していた自分がいたのは確かである。「城」という言葉は、「世界」という言葉に置き換えた方がいいかもしれない。今後も間違いなく、自分の内側の世界を深めていくこと

に従事し続けていくことは避けようがないだろう。しかし、これまでと違うのは、その作業はもはや一人ではできないところにまで到達してしまった、ということである。

これまで自分が絶えず構築しようと思っていたものを「城」と表現するのであれば、おそらく、その所有権は私にしかないことを暗に示唆しているだろう。しかし、ひとたび「城」という言葉から離れ、「世界」という言葉を用いるのであれば、今の私が日々深めていこうとしているものの特徴を、より正確に表現してくれると思うのだ。

自分でも驚いたのは、私の世界の所有権は、私だけに付与されているのではなく、私を取り巻く他者にも付与されていることに気づき始めたのである。これは概念的な気づきではなく、体験を通じた意味での気づきである。それゆえに、この気づきは、自分の内側で生じた変容を確かに示すものだと思うのだ。自分の世界の所有権が私にもあることから、今後も自分でその世界を深めていく試みを怠ってはならない、ということは言うまでもない。

だが、それ以上に重要なことがある。私は自分の世界だけではなく、他者の世界の所有権を保持しているということであり、他者もまた私の世界の所有権を保持しているがゆえに、共にお互いの世界を深めていく関与を行っていくことが何より重要なのである。これは今の私にとって、切実な重要性である。そのようなことを考えると、「所有権」という概念も、今の私の感覚を的確に表すものではないかもしれない。内側の世界の所有性というのは、非常に難しい問題だと思う。

今日参加したクラスの中で、他者と言葉を交わすことを通じて、確かに私の世界と他者の世界という固有の二つの世界を確認することができたと同時に、見逃してはならない共有世界がそこに生起していたことにも気づいていた。さらには、その瞬間に生起した共有世界が、二つの固有の世界に影響を与えていることも見て取れたのだ。他者と同じ世界を共有した瞬間、自分の世界のパレットの色が間違いなく変化したことを見て取った。

他者と私は異なる色を持った世界を構築していながらも、ひとたび二つの色が混じり合い、新たな一つの色を生み出した瞬間に、その一つの色がお互いのパレットの色に浸透していく姿が見て取れたのである。人間の内面世界において、このような現象が起こることは、とても不思議ではないだ

ろうか。お互いの相互作用から生まれが産物が、再び各人に影響を及ぼす構図を目の当たりにした時、私はもはや、これまでの方法で他者や世界と関与できなくなったと言える。

例えば、ロバート・キーガンの段階モデルをこの体験に適用した時、過去の私と現在の私がどのような段階にいたのかは一目瞭然である。しかしながら、そうした説明よりも、その体験自身が何より自分にとって大きな意味を持つものであったのだ。構造的発達心理学の枠組みを頭で理解しようとすることと、それを自己の存在を通じて理解させられることの間には、埋められないほどの大きな溝がある。今回の体験はまさに、存在が知識に追いついた瞬間であり、知識が経験によって智慧に昇華される瞬間であったように思う。

地図を眺めることと、地図上の世界を実際に歩むことは次元が異なるのだ。私はこれからも、実際の世界を確実な足取りで少しずつ進んでいきたいと思う。

539. ダイナミックシステムアプローチを活用した研究の特徴

昨日は、研究プロジェクトに集中する必要があったため、昨日の「複雑性と人間発達」というクラスに関する振り返りがあまりできなかった。記憶が鮮明なうちに、印象に残っていることを書き留めておきたい。

クラスが行われるコンピュータールームに到着した私は、最前列の席を確保した。クラスが始まると、まずはダイナミックシステムアプローチに関する理論的な解説からスタートした。昨日は初回のクラスであるため、各々の受講生にとって、ダイナミックシステムアプローチに関する概要を押さえることは重要であった。最初の論点は、ダイナミックシステムアプローチが発達科学に適用される以前の研究の特徴であった。

日本でも、少しずつロバート・キーガンを代表とする構造的発達心理学の枠組みが人口に膾炙し始めているが、彼らの研究は、基本的にダイナミックシステムアプローチが活用される以前のものに分類される。それでは、過去の構造的発達心理学の研究にはどのような特徴があるだろか？例えば、年齢や社会的地位──企業組織においては役職──に応じて、発達段階がどのような分布になっているのか、という研究成果がある。

さらに、あるグループに発達支援を行い、その効果がどれだけあるのかを、発達支援の介入前後で比較する、という研究などがある。こうした研究から明らかになるのは、最初の例で言えば、15歳あたりに到達すると、ほとんどの子供たちは、抽象的な思考ができるようになる、ということであったり、部長クラスになると、キーガンの段階モデルで言えば、発達段階4に到達している、というようなことだろう。

後半の例で言えば、クライアントよりも発達段階の高いコーチがコーチングを行えば、半年後にクライアントの発達段階が0.4ほど向上する、というような科学的知識が生み出されるかもしれない。これらの科学的知識は、間違いなく価値あるものであり、発達科学の発展に寄与してきたことは確かである。

しかしながら、これらの研究に関して、例えば下記のようなことが疑問に残るのではないだろうか。「子供たちは、具体的な思考しかできなかった状態から、抽象的な思考ができる状態へどのように移行するのだろうか？」「コーチングはクライアントの発達段階の向上にどのように作用しているのか？」「なぜ全ての子どもたちが、同時期に抽象的な思考ができる状態に移行しないのか？」これらの質問は、つまり、「発達現象がどのような人たちに、何によって、いつ、どのように生み出されるのか？」に関係しているものだと言えるだろう。過去の発達科学の枠組みでは、このような問いに回答することは非常に難しい。

なぜなら、そこでは発達のプロセスが蔑ろにされており、各人固有の発達の形というものが見落とされてしまっているからである。要するに、これまでの発達科学の研究では、グループの平均を活用することや、ある一人の人間と他の人間を比較するような個人間の差異（inter-individual difference）に焦点が当てられており、個人内の差異（intra-individual difference）にはほとんど焦点が当てられていなかったため、上記のような問いに回答することが難しかったのである。

この背景には、個人が持つ複雑な発達プロセスを理解する理論と研究手法が欠けていたことが大きな要因として存在している。さらに、既存の発達科学のパラダイムには、そうした多様な発達プロセスを解明しようとする視点が欠けていたとも言えるだろう。このような歴史を経て、現代の発達科学は、徐々にダイナミックシステムアプローチの理論と研究手法を取り入れていったのだ。結果として、

ダイナミックシステムアプローチを活用した発達研究では、「ある要因がいつ・どのように、ある個人の発達プロセスに影響を及ぼすのか？」という問いに回答することができつつある。

このように、個人が持つ複雑かつ多様な発達プロセスに立脚した形で、一人一人の個人の発達にとって意味のある科学的知識を生み出すことができるようになってきていることは、非常に大きな意義を持っていると思うのだ。

540. 内面世界の景観を開くもの

「ユーフラテスの流れの景観が開けてくるのは、歩みにつれてである」ヘロドトス

「複雑性と人間発達」というコースの振り返りがなかなか終わらない。初回のクラスで理論的に扱った内容はそれほど多くはないのだが、一つ一つの概念を自分の存在を通過させながら理解をしていこうとすると、振り返りに相当な時間を要する。しかし、こうした振り返りを蔑ろにしていては、自分の内側で深まるものは一切ないだろう。また、その日一日が自己の軌跡を辿ることができないほどの低密度なものであれば、それは真の意味でその日を生きていなかったことを如実に示すものだと思う。

自分にとって、その日を真の意味で生き抜き、内側の歩みを確実に一歩でも進めていくことは何にも増して重要である。ある一歩から、次の一歩へ移行する自分の姿を観察するとき、ダイナミックシステムアプローチで重要とされる「反復性」と「非線形性」という概念が思い浮かんだ。「反復性」というのは、動的なシステムである私たちの知性や能力は、必ずある状態が存在することによって、次の状態へ至ることを示す言葉である。知性や能力で考えることが難しければ、アイデンティティを例に取ってみると分かりやすいだろう。今日の自分のアイデンティティは、昨日のアイデンティティに基づいて構成されているものであり、昨日のアイデンティティは、一昨日のアイデンティティに基づいて構成されている、と言える。

まさに、私たちのアイデンティティは、一つの状態から次の状態に移行するという、反復的な積み重ねによって発達していくのである。こうした積み重ねこそが「発達のプロセス」なのだ。これまでの発達研究では、発達現象の最初の状態と最後の状態を比較することに留まるものがほとんであり、それは発達のプロセスを蔑ろにしていることが一目瞭然だと思う。

毎日文章を書くことによって、自分の一歩一歩の足取りを確認しようとしているのは、プロセスとしての自分の歩みを尊重し、その歩みをより確固たるものにしていくためなのかもしれない。今日という日を振り返りながら文章を書くとき、昨日存在しなかった一歩が、確かに今日という日に生み出されていたことを知る。これは、プロセスとしての人間である私を大いに励ますものである。

そして、日単位でのプロセスを眺めてみると、そこに「非線形性」が生じているのがわかる。「非線形性」というのは、ある要因が、他の要因やシステム全体に及ぼす影響が一定ではなく、変化に富むということを意味する。一日一日を比較してみると、自分の歩みが一定ではなく、様々な要因による影響を受けながら紆余曲折しているのがわかる。まさに人間の成長は、反復性と非線形性の賜物なのだと理解することができる。

日々の文章は、自分の一歩一歩の歩みを教えてくれるだけではなく、その一歩一歩がどのような紆余曲折を経たものであったのかも教えてくれるのだ。内面世界の景観を開いていくためには、日々の足取りと紆余曲折を噛み締めながら、とにかく歩み続けなければならない。

© YOHEI KATO 2018